

～足を守ろう～ あなたの足は大丈夫

『足の傷から感染・・・壊疽をおこすのはなぜか』

神戸掖済会病院

皮膚科医長 佐々木 祥人

1：誰にでも生じうる足感染症 写真1

『朝起きたとき足趾^{そくし}などがうずき、赤く腫れている。』このような経験はおそらく老若男女問わず誰にでも数度は経験があるのではないのでしょうか。簡単な消毒と絆創膏などで対処し、数日すれば治まっていることがほとんどだと思います。しかし、その後足の傷が治らず足が腫れ歩けなくなり、足だけでなく38度から39度の熱がでて、場合によっては足が変色し、慌てて病院を受診・入院となる患者様は少なくありません。通院、場合によっては入院が必要となる患者様は統計上70歳が多いのですが、比較的若い10代でも珍しくありません。

2：足感染症を起こす足病病変について 写真2

足感染症を起こす患者様は、けが等の外傷をきっかけに生じることもありますが、実際には稀で、もともと何らかの足病変を生じている患者様がほとんどです。

A) 足白癬^{あしはくせん}：趾間^{しかん}に生じる白癬を趾間型としています。白癬（注1）が更なる重症感染症の基礎になっている患者様は1番多いとされています。

B) 鶏眼^{うおのめ}・胼胝^{たこ}：いわゆるウオノメ、タコといわれている疾患ですが、その硬い皮膚の下に感染が生じている場合も多くみられます。

C) 陥入爪^{かんにゅうそう}：巻き爪のことですが、そこからひょう疽^そ（注2）等の感染症を生じる患者様も多くいます。

3：足壊疽^{あしえそ}ってなんですか

足感染症などを契機に急性に発生する皮膚皮下の重症感染症から足がいわゆる『くさる』という壊死^{えし}を生じることがあります。これを壊疽と総称しています。壊疽は足だけではなく、手などにも生じます

4：足壊疽の下には隠れている病気がある 写真3

若く一見病気がなさそうでもA群β溶連菌（注3）といった強い細菌感染では足壊疽が生じる場合がありますが、足壊疽を生じる患者様の多くは基礎疾患を有していることが多いです。1番多いのは糖尿病で、その他高脂血症、心疾患、膠原病^{こうげんびょう}等があります。糖尿病に関しては、心病変などとともに足の血管の閉塞・狭窄を生じ、閉塞性動脈硬化症（末梢動脈病変）という病態を有している人が少なくありません。閉塞が高度になると足に治りにくい傷ができやすくなり、また安静にし

ていても足に痛みが生じることがあります。

この閉塞性動脈硬化症の中期の症状として^{かんけつせいこう}間欠性跛行という症状があります。これはしばらく歩いていると足が痛くなり、立ち止まらずをえなくなりますが、しばらくすると痛みがなくなり、歩き出すことができるようになるといった症状ですが、この症状がある人は出来るだけ早期に医師に相談することが望ましいと考えています。

5：神戸掖済会病院での取り組みについて

足の皮膚に症状が出た場合、皮膚科に相談されるケースが多い為まず入り口としての評価（ABI（注4）、SPP（注5）、採血など）を行い、動脈疾患があるのかどうか、糖尿病素因があるのかなどチェックしたうえで

- 1、基礎疾患があり、予防的医療を必要とするもの
- 2、基礎疾患があり、集学的治療が必要となるもの
- 3、基礎疾患は不明であるが、基礎疾患を有する可能性があり、かつ集学的治療が必要となるものかどうかの判断を行っています。

循環器内科、整形外科、血管外科、皮膚科、形成外科などの学際的な医学的知識をもとに、あらゆる医療専門職のスキルを生かせるように相談しつつ日々医療を行っています。

注1：白癬：皮膚糸状菌という真菌（カビ）によって生ずる感染症で一般的に水虫・たむしとよばれています。

注2：ひょう疽：手指あるいは足趾（足の指）に細菌が感染して起こる病気（指趾末節の蜂窩織炎）です

注3：A群β溶連菌：皮膚に感染すると、蜂窩織炎（ほうかしきえん）や丹毒、とびひなどの症状があらわれることがあるといわれています。

注4：ABI：両手（上腕）両足（足首）の血圧を同時に測ることによって、動脈硬化を調べる検査です。

注5：SPP：レーザー光を用いて皮膚の微小循環を測定する装置です。

写真1

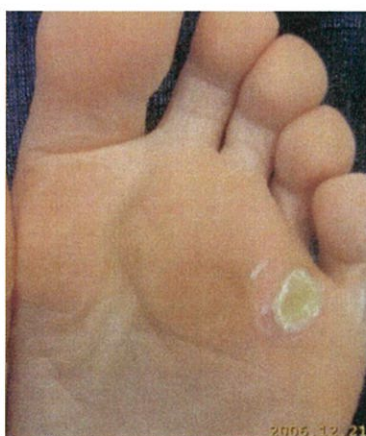


写真2



写真3



神戸掖済会病院

〒655-0004 神戸市垂水区学が丘1丁目21番1号

TEL：078-781-7811

FAX：078-781-1511

URL：http://www.kobe-ekisaikai.or.jp